HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	YouTubeを使った動画配信型会話能力試験の試み
Author(s)	鈴木, 紀子
Citation	日本語・国際教育研究紀要, 24, 29-49
Issue Date	2021-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80919
Type	bulletin (article)
File Information	24_2.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

報告１

YouTubeを使った動画配信型会話能力試験の試み

鈴　木　紀　子

要　旨

本稿は、初級レベルの日本語の会話能力を計る同時配信型のオンライン試験をYouTubeの動画配信を使って行った試みの報告である。

日本語研修コースで筆者が担当していた「初級会話」クラスでは、コース後半に自国と日本との教育システムの違いを考えさせ、クラスメイトと情報を共有し合う活動を行わせていた。期末試験はその学びの成果を発表する場で、学生は自国の教育制度とその問題点をテーマにスピーチ原稿を書き、スピーチ自体は原稿無しで行っていた。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、2020年度第１学期の授業はオンラインで行われることとなった。入国できた学生は１人だけで、彼はクラスメイトの学び合いからスピーチを作り上げることもできず、外出制限がかけられ、日本にいるにも関わらず、授業以外で学んだ日本語を使ってコミュニケーションを実践する機会をほぼ失ってしまった。

これまでのようなスピーチを期末テストとすることはできなくなったため、期末試験の目的を現実の使用場面に近い即興での発話能力を見ることとし、１つの試みとして、Microsoftのパワーポイントと複数の無料の音声編集ソフトを用い、会話の場面が音声以外でもわかるようイラストを組み込んだ動画による試験問題を作成し、YouTubeでそれを限定配信する形式で試験を実施することにした。学生は自分のスマートフォン（以下スマホ）の録音機能を稼働させた状態で、その動画の指示に従って動画内の話者と対話し、そのパフォーマンスの録音データを答案として提出するのである。

結果、このような試験問題動画の作成はパソコンとマイクとインターネット環境があれば、他の物品コストをかけずに作成・実施することは可能であることがわかった。また、面談式試験で生身の教員が発話相手になることで起こりうる教員側の疲労による集中力の欠如などによる評価のブレを回避できることや、学生はＰＣを持っていなくても受験がで

きることなどの気づきが得られた。一方で、このような試験を行うには教員、学生共に充分なWi-fi環境があることが必ず必要であることや、問題を作成するには教員がＩＣＴツールに習熟する必要があり、それには時間もかかることもわかった。

現状、教員の殆どはオンラインのプロではない。ＩＣＴツールの習得・習熟については、教員個人の努力に頼るのではなく、所属教育機関からＩＣＴツールに習熟するために充分なサポートがなされることを望むものである。

〔キーワード〕日本語教育、日本語初級、会話能力試験、動画配信、YouTube

1.　日本語研修コースと「会話クラス」の授業の目的

筆者は2020年度第１学期に日本語研修コース（以下、研修コース）で「初級文法」と「初級会話」のクラスを担当した。このコースは、「初級文法（週８コマ）」「初級会話（週２コマ）」「初級発音・聴解（週１コマ）」「初級作文（週１コマ）」「初級読解（週１コマ）」「初級漢字（週２コマ）」のクラスで構成される、初めて日本語を学ぶ者のための集中コースである。コース終了時には、大学生活に必要な初級レベルの日本語を理解・運用できることを目指す。１週に計15コマ（１コマ90分）の授業が16週間あり、学生は全てのクラスに出席することが求められる。定員は10名で、対象者は大使館推薦の国費外国人留学生（研究留学生）と教員研修留学生だが、空席がある場合は学内の私費外国人留学生のうち、大学院進学予定の研究学生も受け入れている。

本稿で取り上げるこのコースの「初級会話」クラスは、

①場面に合った表現・語彙とその用法を学習すること。

②相手の発話を理解し、会話を進めるスキルを学習すること。

③文法・表現・語彙の用法を学び、スピーチができるようになること。

の３点を授業目標とし、授業でのパフォーマンス45％（教室内パフォーマンス20％、宿題25％）、中間試験25％、期末試験30％で成績を評価している。また、学生はレベルの差はあれほぼ英語ができるため、英語ができない学生がいる学期を除いては、必要に応じて英語を媒介語に使いながら授業を行っている。

2.　コロナ禍前の「初級会話」クラスとその定期試験

このコースで最も時間数が多い「初級文法」クラスでは、教科書に「みんなの日本語初級本冊」のⅠとⅡを使用している。そのためコロナ禍以前の「初級会話」クラスでは、コース期間が半分過ぎた時点で中間試験として「みんなの日本語初級本冊」のⅠの文法を使用文法範囲とした「私（学生自身）」に関するスピーチを原稿無しで行わせ、学生がごく基本的な日本語の語順や文型、語彙を理解し、それらを使えるようになっているかを見ていた。

また、コース終盤には学生全員が小学校を訪問し、子供達に出身国を日本語で紹介するプロジェクトがあったため、学生たちは学校訪問前に「初級会話」クラスで日本の小学校についての基礎知識を学び、その上で小学校を訪問して自国を紹介する一方で、その小学校をよく観察し、自国の小学校と比較し、利点・欠点を考え、クラスメイトと情報や自分の考えを日本語で共有するという活動を行っていた。「初級会話」クラスの期末試験はその学びの成果を発表する場で、学生たちは自国の教育制度とその問題点をテーマに日本語でスピーチ原稿を書き、スピーチにはその原稿無しで臨んでいた。

3.　コロナ渦オンライン授業での問題

しかし、コロナ禍ウイルスの感染拡大は、本学での2020年第１学期授業を全てオンラインで行うことを余儀なくさせた。そればかりか、コースの受講予定者が入国できない事態ももたらした。実際の学生がモンゴルからの学生１人だけとなってしまったのである。

もちろん､学生はたった１人であるため､授業はオンラインでのマンツーマン授業となった。当然この学生は、通常の本コースのクラスでは考えられないほどきめ細やかな指導を受けられた。しかし、コロナ渦で予定されていた小学校訪問は中止となり、普段の外出も控えなければならない。つまりこの学生は、日本国内にいるというのに、クラスメイトと日本語の使い方や表現のしかたを確認しながら情報を共有することも、学生が日本語で発話することを積極的に促してくれる小学生との交流も、大学の外で日本語で積極的に人と交流する機会も奪われてしまったのである。

オンライン授業の実施は筆者にとっても戸惑うことが多かった。中間試験はこれまで通りスピーチを行わせてみたが、オンラインの状態ではＰＣ

画面の向こう側にいる学生が本当に原稿無しでスピーチに臨んでいるかを確認するすべがなかった。また、コロナ禍前は教室内で学生同士の日本語のやりとりを観察することで、学生個々人の日本語の理解度や反応の速さ、発話する日本語の内容や既習文法の定着度合いなどが確認できていたが、オンラインのマンツーマン授業となると、学生が筆者以外の者が話す日本語を聞き取り、相手をひどく待たせることなくスムーズにやりとりが行えるのかは分かりづらい。例年通りの期末試験を行うことはできないと判断せざるを得なかった。

今までの期末試験や評価判断の方法がとれないとなった以上、早急に期末試験のあり方を変えなければならなかった。期末試験の形が変われば必然的に授業方法も変えなければならないからだ。

4. 代替方法

まず考えたのは、期末試験前の活動で授業目標を達成させるのではなく、期末試験を授業目標達成確認のための手段として学生に明示することで授業目標達成のための自律学習を動機づけることだった。そのため、試験評価のルーブリックを組み、学生に事前に期末試験の目的とルーブリックとを提示しておくことにした[1)]。今回の試験のために作成したルーブリックとその使用例は図１のとおりである。

図１内にある「T（数字）」は、試験問題のタスク番号である。図１の手書きの文字が示しているように、教員はタスクごとの学生のパフォーマンスがルーブリックの評価項目のどのレベルに達しているかを選んで○をつけ、○をつけたマスに書かれた点をそのマスにつけた○の数と掛ける。そうして算出された数字を全て合計したものが、試験の得点となる。

ルーブリック作成に当たり、まず試験の目的を現実の使用場面に近い即興での発話能力を見ることで、既習日本語文法を用いた発話の習熟度を測ることとした。これなら１節で述べた「会話クラス」授業目標の①と②の到達度を試験で確認できると考えたためである。したがって試験の評価は、既習の文法が正しく使えているかよりも、発話された内容が他者に伝わるか伝わらないか、タスクがクリアできているか否かを優先することにした。加えて授業目標の③をクリアするために、試験問題には何かのトピックについてある程度長い時間、段落レベルでの発話をしなければならない問題を組むことにした。また、試験の難度は初級（「みんなの日本語

Sample (96%)

Final Exam Rubric　　Name: Taro Hokudai　　191 /200

①流暢性 Fluency			
5: Superb! 5x9=45	4: Well done! 4x1=4	2: Fair	1: Need more efforts.
Smooth. Use pauses and fillers naturally. Does not sound like reading or mechanical.	Contain pauses, reformulations, and self-corrections as they search for adequate vocabulary and appropriate language forms to express themselves.	Groping for words.	Occasional use of English/mother tongue.
(T1) (T2) (T3) (T4) (T5) (T6) (T7) T8 T9 (T10)	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 (T8) T9 T10	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 T10	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 T10

正確さ Accuracy ※The accuracy of the content of your answers are not evaluated in this test. This part is just FYI.			
Superb!	Well done!	Fair	Need more efforts.
Grammatically correct sentences. No problem to understand.	Simple but grammatically correct sentences. Mostly understandable.	Can make sentences using very limited and simple vocabulary. Mostly understandable if the listener worked hard to understand the story.	Hard to understand even delivered several times.
(T1) T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 (T10)	T1 (T2) (T3) (T4) (T5) (T6) (T7) (T8) (T9) T10	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 T10	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 T10

②内容 Contents			
5: Superb! 5x10=50	4: Well done!	2: Fair	1: Need more efforts.
Often talk about myself, but sometimes tries to talk about general matters. Also, tried to speak in order.	Simple, but can talk about oneself. Although rare, tried to speak in order.	Can tell a simple story, limited to just about oneself.	Broken sentences.
(T1) (T2) (T3) (T4) (T5) (T6) (T7) (T8) (T9) (T10)	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 T10	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 T10	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 T10

③文の種類 variations of sentences			
5: Superb! 5x4=20	4: Well done! 4x6=24	2: Fair	1: Need more efforts.
Sentence level discourse. Can use conjunctions appropriately.	Use some conjunctions. Have variety in using sentence patterns.	Can make simple correct sentences. Hardly no conjunctions.	Can't complete sentences. Use of only discrete words and phrases.
(T1) T2 T3 (T4) T5 T6 T7 T8 (T9) (T10)	T1 (T2) (T3) (T4) T5 (T6) (T7) (T8) T9 T10	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 T10	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 T10

④タスクの出来 Achievement of task			
5: Superb! 5x8=40	4: Well done! 4x2=8	2: Fair	1: Need more efforts.
Could complete the required task more than expected.	Could complete the required task.	Could somehow complete the required task.	Couldn't complete the required task.
(T1) (T2) T3 (T4) (T5) (T6) (T7) T8 (T9) (T10)	T1 (T2) T3 T4 T5 T6 T7 (T8) T9 T10	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 T10	T1 T2 T3 T4 T5 T6 T7 T8 T9 T10

図1　オンライン試験用に作成した評価用ルーブリックとその使用例

初級本冊１・２」）終了程度とした。

従来、筆者は初級レベルの会話クラスで、日本語での意思疎通が上達していない学生に、練習させる会話の場面を理解させることに最も困難を感じてきた。特に比較的日本語能力が低い学生の場合は、日本語で説明しよ

うにもすぐに伝わらないこともあるので、教室ではその会話場面の絵を描いて見せたり、動画や画像を見せることも多い。

しかし、そのような学生を相手に現実の使用場面に近い即興での発話能力を見る試験を行うとなると、画面越しのインタビューでは場面提示がしづらい。音声だけで場面提示をして問いに答えさせるような試験も、学生には場面が視覚的に見えないため、音声を認知できず、自分が答えるべき内容すら理解できず、一言も答えられないまま終わってしまう可能性がある。英語と絵で場面の説明と指示が書かれた小冊子を渡し、音声でも同じ説明と指示が行われて、受験者がそれを聞きながらパフォーマンスを録音するSimulated Oral Proficiency Interview[2)]という試験の形式もあるが、その形式だと小冊子を印刷し、それを学生に郵送しなければならない。また、試験問題の指示はできる限り日本語で行いたい。それならば、試験問題を動画にして、流れてくる日本語の音声の説明の理解が進むよう、文字やヒントとなるイラストも見せながら問題を提示すれば、彼らでもなにがしかの発話ができるのではないだろうかと考えた。早速、試験問題を動画で作ってみることにした。

5.　試験問題を動画で作る

試験問題の動画はパワーポイントのスライドに文字、イラスト（アニメーション機能も使用）、音声を重ねたものを動画（ＭＰ４）形式で保存することで作成した。動画の時間は約35分である。試験の概要説明や指示もスライドに文字で表記し、音声でも読み上げる形を取った。動画での概要説明は、学生が内容をよく理解しないまま受験をすることの無いよう媒介語（英語）を使った[3)]。しかし、筆者の英語の発音はあまり良いものではないため、英文は無料アプリ“Softalk”を使ってＰＣ（Microsoft Zira）に読み上げさせた音声を録音した。図２は試験冒頭の概要説明の画面である。

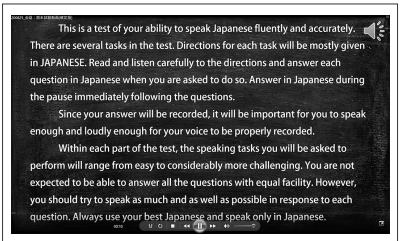

図２　試験概要説明の画面

日本語音声は筆者と筆者の娘が担当した。問題によっては、やりとり自体の例も音声で示すことで、問題の場面と学生が何を求められているかがわかるようにした。図３は試験動画問題の第１問目の画面である。

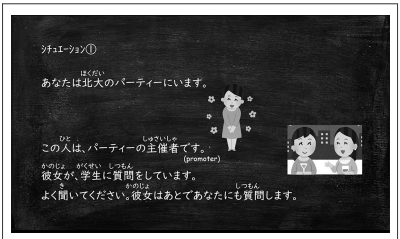

図３　試験動画問題の第１問目の画面

学生は画面から流れて来る指示に従い、学生に問いかけられる質問やコメントの音声に適切な発話で答えなければならない。問題となる質問やコメントは一度しか発話されない。また、学生の発話時間には制限時間を設けたため、学生が自分の発話を録音できる残り時間がわかるよう、発話のタイミングに合わせて制限時間を示す矢印が徐々に消えていくようにアニメーションの設定をした。

図４はパート１の１問目の解答時の画面である。矢印が５本並んでいるが、一番上の矢印が画面の右に移動している。矢印は解答時間である８秒をかけて画面右側に消えていく。

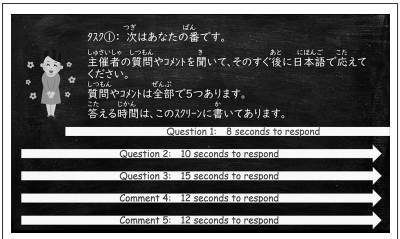

図４　パート１の１問目の解答時の画面

作成した試験問題動画の問題は３パートに分け、大問は計10題とした。パート１は「みんなの日本語本冊１」の知識があれば答えられる単純な質疑応答形式の問題とした。パート２は質問に対し、少し長い時間を与え、発話内容の自由度が高い問題とした。パート２では会話の場面や発話しなければならないことは文字と音声とイラストとで提示したが、パート２の最後の問題は初級レベルとしては抽象度も高く、話す時間も２分と長く設定したので、問題の認知的負荷を減らすため、文字による説明は英語で行った。図５はパート２の３問目の画面である。

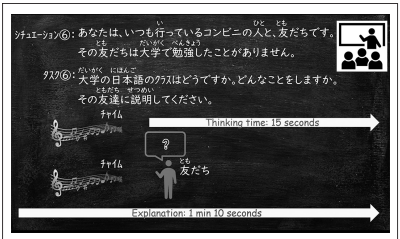

図５　パート２の３問目の画面

パート３は、パート１と２のように学生が試験問題動画からの質問やコメントに答えることを問題にするのではなく、設定された場面で、試験動画に要求された内容の質問を日本語ですることを問題とした。学生に発話すべき内容を正確に理解させるため、パート３での指示は全て英

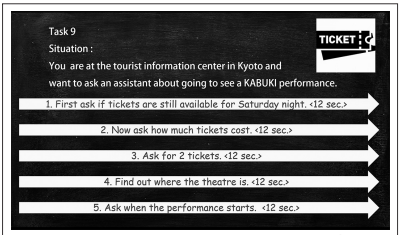

図６　パート３の１問目画面[4)]

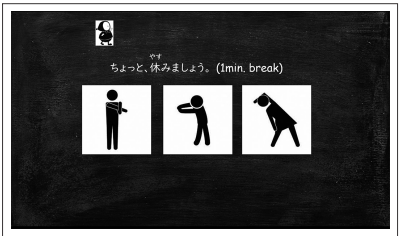

図７　休憩用の画面

語で行うことにした。学生はどのような質問を日本語ですべきかの指示が示された直後に日本語でそれを発話しなければならない。図６はパート３の１問目の画面である。

結果的に試験問題動画は30分を超えるものとなったため、学生の集中力を持続させる目的で、途中２回、各１分ずつの休憩をはさんだ。図７は休憩用の画面である。画面上部にいる小人が音楽と共に１分かけて画面を１周することで、学生に休憩の残り時間を知らせている。

試験問題の詳細は、表１のとおりである。各パート共、問題を進むご

表１　試験問題の詳細

	設定場面と問題	問題詳細
パート１：質問に答える。	①パーティーの出席中、パーティー主催者からの質問に答える。（質問数５）	聞かれたことに答えるごく単純な自己紹介。
	②自分の国の祝日について、質問に答える。（質問数４）	自分の生活に直結しているわけではないが、よく知っていること（文化・風習・慣習）について、質問に答える。
	③新任の担任からの質問に答える（質問数３）	自分の過去・現在・未来について、質問に答える。
休憩：１分		
パート２：説明する。	④たくさんの人の前で、１分間自己紹介をする。	一定時間のみが与えられた、発話内容の自由度が高い自己紹介をする。
	⑤引っ越したばかりの自分の家について１分間話す。	空想又は実際に自分が住んだ・住んでいる家について、具体的に説明する。
	⑥大学の日本語のクラスがどのようなものか、ともだちに１分10秒かけて説明する。	自分が今実際に経験していることを説明する。

	⑦小学校で好きだった先生について話す。（質問数４）	自分の過去の経験を説明する。
	⑧日本から自国に来た交換留学生に日本語で自国と日本の文化の違いについて２分話す。	自分がよく知っているとはいえ、抽象度が高い話題について説明する。
休憩：１分		
パート３：場面に合わせて質問する。	⑨店の人とのやりとり。チケットを買う。（問題数５）	サバイバルレベルの日本語。 クラス活動で練習したフレーズを覚えていれば答えられる。
	⑩知り合ったばかりの学生に質問する。（問題数４）	スピーチレベルの使い分けを意識しつつ質問をする。

とに難度が高くなるようにした。

試験問題動画の配信にはYouTubeを使うことにした。無料であり、自分とＵＲＬを知っている一部のユーザーだけしか見られない限定公開ができ、インターネットに接続しながら映像や音声を再生するストリーミング再生をするからである。ストリーミング再生は動画ファイルをダウンロードをしないため、学生が試験で使うデバイスのストレージ容量を使わない。また、YouTubeを使ったことが無い学生は少ないだろうとも考え、試験問題動画を滞りなく見るためには、YouTubeの使用が無難であろうと判断した。

6.　期末試験実施手順

以下に今回試みた期末試験の手順を述べる。

① 教員は試験問題動画を作成。試験前にYouTubeの限定公開で試験問題動画をアップし、そのリンクをGoogle Classroom（以下、Ｇ.Ｃ.>）の「授業」機能の「課題」を使って配信できる状態にしておく。「課題」の説明欄、およびYouTubeの動画の内容説明欄には日本語で当日行う注意事項を記載しておく。

② 試験日当日：Zoomミーティング開始。

③ Zoomの画面共有を使い、学生に以下の注意事項を口頭で説明。

・ 学生自身のスマホの録音アプリで録音する。

・ 教員の試験開始合図（Ｇ.Ｃ.にYouTubeのリンク配信）後、学生

は自分のＰＣのＧ．Ｃ．にリンクが配信されたことを確認してから、Zoom MTGルームを一旦退出する。教員はZoom MTGルームで待機。

- ＧＣに配信された試験用のYouTubeのリンクをクリックすると試験開始。学生は動画の指示に従って話し、それを録音する。
- 一度動画を始めたら、それが終わるまでYouTubeもスマホも停止ボタンを押さない。
- 途中で一時フリーズしてもあわてずにそのまま再生を待ち、試験を終了する。
- 動画再生時間は約35分。締切時間は開始合図から45分後。時間内に録音した音声ファイルを提出する。
- 音声ファイル提出後、Ｇ．Ｃ．の試験配信に使った“Classwork”の“Turn in”ボタンを押す。
- 試験中、どうしようもできない問題が発生したら、Zoom MTGルームに戻る。
- 試験が終わったら、Zoom MTGルームに戻る。

④ 学生にスマホの録音アプリを開かせ、録音をスタートさせる。

⑤ 録音を止めないように注意した上で、YouTube（限定公開設定）のリンクをＧ．Ｃ．のclasswork機能の「課題」配信機能を使って配信し、試験開始宣言する。「課題」には提出締切時間を設定しておく。

⑥ 学生は一旦Zoomを抜け、自分のＧ．Ｃ．に配信されたリンクをクリックして、試験問題動画を始める。

⑦ 試験問題動画終了後、学生は録音を停止。自分の録音ファイルをＧ．Ｃ．経由か添付メールですぐに教員に提出。Zoom MTGルームに戻って、Google classroomの試験配信に使った「課題」の「提出」ボタンを押す。

⑧ 教員が学生の音声ファイルの受領を確認して終了。

7. 試験実施に当たって工夫した点

学生には、試験２週間前に試験問題動画冒頭の概要説明の部分を一度見せ、同じ内容を日本語でも説明し、学生からの疑問にも答えておいた。加えて、評価用のルーブリックもこの段階で提示した。これにより、学生に試験の目的や採点ポイントを十分理解し、それが、積極的に日本語で話す

練習をする動機付けになることを期待した。

また、試験実施時に学生が滞りなく受験できるよう、音声ファイルのやりとりに慣れさせるため、特定のトピックについて学生が自分の発話をスマホで録音して教員に送信する形式の宿題を学期後半から最低週に1度は提出させるようにした。ただそれにより、試験中に録音で使用しているスマホのメモリが一杯になってしまって録音できなくなってしまってはいけないので、試験日前までにスマホのメモリを空けておくよう繰り返し念を押した。

学生の通信環境によっては、YouTubeでの動画視聴中に動画がフリーズしてしまう可能性がある。学生には試験実施説明の時点で事前に動画がフリーズしても慌てずに再開されるまで待つこと、また、試験は全て録音しているので、待っている間は動画が止まっている実況を話すよう指示した。

8.　この試験の利点と欠点

ここでは今回の試験実施によって気づいた、この試験の利点と欠点または負担を技術面、教員、学生の観点からまとめておく。

8.1　技術面での利点と欠点

まず、この試験の技術面の利点は、学生がスマホを持っていれば教員側が受験用の機材を学生のために用意する必要はないことと、解答用のデータを教員と学生が共に所持できることが挙げられる。

今回の試験ではパフォーマンスを録音するために学生自身のスマホを利用し、動画を見るには学生のＰＣを使ってもらったが、学生によってはスマホは持っていてもＰＣは持っていないという場合もあると思われる。この試験は、ストリーミング再生で動画ファイルをダウンロードをしないため、学生が試験で使うデバイスのストレージ容量を問わない。スマホは動画の再生をしながら録音もすることも出来るため、ＰＣが無くても受験できる。

また、学生は自分が録音した音声データを教員に送るため、自分のパフォーマンスのデータは学生の手元に残る。採点後の教員からのフィードバックを元に手元にある音声データを何度でも聞き直すことができる。

しかし、この試験の実施はインターネット環境が充分で無ければならな

いという制限を持つ。通信状態が不安定であれば、試験問題動画の音や映像が途切れる可能性があるからだ。加えて、インターネット環境がWi-fiで利用できる状態でない場合は、動画のデータ通信量の多さからスマホで試験を見ている途中で通信速度制限がかかってしまったり、携帯料金が余計にかかってしまう可能性もある。この形態の試験実施には、充分なインターネット環境、特に、通信速度の低下や通信障害が起こりにくいWi-fi環境が、できれば無料で教員・学生共にあることが求められる。

また、スマホの録音機能はその機種によって一度に録音できる時間が異なり、機種によっては30分録音すると自動的に録音を停止してしまうものもあるようだ。録音用機器に学生のスマホを使う場合、学生それぞれのスマホの録音機能の制限を把握したうえで、それに合わせた動画時間を設定する必要がある。

さらに、試験を滞りなく進めるためには、受験時の注意事項を学生に徹底し、解答用に録音した音声ファイルの送信方法にも習熟させておく必要がある。学生だから、または若いから機械類に強いなどと勝手に思うのは偏見だろう。学生にもＰＣが苦手な者はいるし、スマホの適切な使い方を知らない者もいる。皆が同じ条件で試験を受けられるよう、機器の使い方がよくわからない学生がいないかを確認し、サポートしておく必要がある。クラスが多人数になればなるほどこれらの徹底を工夫する必要があるだろう。

8.2　教員にとっての利点と負担

この試験を実施する教員にとっての利点は、試験実施時間が試験問題動画の再生時間だけで済むこと、難度の異なるタスクに対する受験者のパフォーマンスのデータが一度に相当量とれること、評価に時間をかけられること、試験問題作成の物理的コストが低いことが挙げられる。

通常のインタビューのような対面型の口頭能力の試験では、受験者である学生の数が増えれば増えるほど教員が試験に関わる時間は長くなる。どれだけ訓練されていても教員は生身の人間である。体力や集中力が落ち、判定結果の妥当性と信頼性が落ちてしまう可能性は否めない。しかしこの形式の試験の場合、試験問題動画１本で、教員は実際に学生と面談することなく一度に人数分の試験を行うことができる。また、解答は録音されているので、何度でも聞き直して判定をすることもできる。

また、対面型の口頭能力の試験は、授業時間の制限があるため、クラスの人数が増えれば増えるほど一人当たりのインタビューの時間が少なくなってしまう可能性がある。しかし、この試験の場合、試験時間は試験問題動画の再生時間までである一方、その時間×受験者数分のパフォーマンスのデータが一度に取れる。

試験問題動画の作成については、インターネットに繋がることができるＰＣとマイクがあれば、動画の作成自体はMicrosoftのパワーポイントで、音声の編集はRenee Audio Tool[5)]や、Sound engine[6)]、Audacity[7)]などインターネット上で手に入る無料のアプリを使って、他に物品的な作成コストをかけずに試験問題動画を作ることができる。動画の作り方やアプリの使い方はインターネットで「パワーポイントを使った動画の作り方」や「＜アプリ名＞の使い方」などと検索語を入れれば、簡単に情報が得られる。動画投稿者としてのYouTubeの使い方などは書籍[8)]も出ているので、それを利用することもできる。

ただし、この情報を得て、それを理解し、動画を作成するのは時間がかかる。ＩＣＴツールに習熟するにも時間がかかる。また、ＩＣＴツールの有料サービスを使えば簡単な作業も、金銭的コストをかけられない場合は、無料のツールで行える範囲を超える機能は使えないため、教員自身が手間（時間）をかけることでそれをカバーすることになる。

教員の多くはオンライン教育のプロではない。コロナ禍以前から、教員がＩＣＴツールに習熟していることが当たり前に求められるようになりつつあったが、Hattie（2009）[9)]は、コンピューターの利用をより効果的にするためには、教授・学習ツールとしてのコンピューター利用について、何らかの事前トレーニングが必要だとして、「10時間以上の事前トレーニングを受けた教員による授業の学習成果はコンピューターを平均的に利用した授業と比べて72％分高い」というJones（1991）[10)]の指摘を引用している。それを踏まえると、10時間以上もの事前トレーニングを教員個人の自助努力に頼むのには無理がないだろうか。

8.3　学生にとっての利点と負担

この試験を受験する学生にとっての利点は、受験のしやすさと、試験で課せられるタスクの認知難度が比較的低いことだろう。

学生は、スマホを持っていて、インターネットの環境が整っている場所

にいれば、どこでも受験することができる。したがって、周りの環境に過敏で教室での受験では集中しづらい学生でも、自分が最も落ち着く環境で受験することができる。

また、問題や指示は音声で示されるだけでなく、文字でも表示され、ヒントとなるイラストもついているため、音声だけで問題を出されるより学生が問題を認知する難易度は低くなる。比較的日本語能力の低い学生だけでなく、難読や弱視等の障がいを持つ学生にも受験しやすいのではないだろうか。

一方、彼らの一番の負担となるのは通信環境と機器が無い場合だろう。十分な無料Wi-fi環境がなければ通信費がかかることになるし、機器を持っていない場合は購入する必要がある。

9. おわりに

このコロナ禍で、多くの教員が否応なくオンライン授業を実施することとなり、ＩＣＴツールを使用することになった。自由になる時間や睡眠時間を削ってＩＣＴツールの使い方を身につけ、授業プランを立てた方も教員も多いと思う。しかし殆どの教員はオンライン教育のプロではない。とにかく走りながら手探りでオンライン授業を実施していく中で、一体どの程度の教員がＩＣＴツールを使いこなし、質が高いと自信を持って言える授業を行えた、または行えているだろうか。

ＩＣＴツールは、習熟してしまえば授業の進め方を大きく変えることができるものだろう。より良い機材や有料のサービスをうまく使えば、教員の作業をなお一層短縮することできる。しかし、このようなツールに習熟するにはトレーニングが必要で、個人差はあるが時間がかかる。また、ツールの使用に金銭的コストをかけられない場合、無料のツールで行える範囲を超える機能は使えないため、結局は教員自身が手間をかけることでそれをカバーすることになる。「手間」という目に見えないコストが発生するのである。

ＩＣＴツールは日々すさまじい勢いで進化している。このコロナをきっかけにオンラインを利用した授業の実施は、今後、教員に当たり前に要求されるようになるだろう。ＩＣＴツールを導入したところで、自在に使えなければ意味が無い。オンライン授業を活かし、よりよい教育を行うために、教員の所属教育機関はＩＣＴツールの習得・習熟を教員個人の努力に

頼るのではなく、ツールに習熟するまで教員をサポートをする体制を常に整えておくことを切に望むものである。

注

1）ルーブリック作成に当たっては、北海道大学2016年度版日本語スタンダーズ、牧野成一他（2001）p.18-19、牧野成一他（2020）p.66-67、ＪＦ日本語スタンダード共通参照レベル：自己評価表を参考にした。

2）SOPIについてはCharles Stansfield（1989）を参照のこと。

3）この試験の試験概要を説明する英文は、OMF International Japanese Language Centre（作成年不明）の試験概要説明部分の英文を許可を頂いて一部変更し、使用させていただいた。国際福音宣教会日本語・日本文化センターにはこの場を借りてお礼申し上げます。

4）この問題は©OMF International, Japanese Language Centre

5）Renee Audio Toolを使った、音声ファイルを1つのファイルに結合する方法の詳細は、「Renee Audio Tools（レニー オーディオ ツール）」https://freesoft-100.com/review/renee-audio-tools.htmlを参照。（2020年12月28日最終検索）

6）Sound engineを使った、音声ファイルの音量をそろえる方法の詳細は、「チャーリーが乗っています―音楽ＣＤをつくるとき、音量をそろえる：SoundEngine Free編」
https: //bbb9780. wordpress. com/2015/04/29/%E9%9F%B3%E6%A5%BDcd-%E3%82%92%E3%81%A4%E3%81%8F%E3%82%8B%E3%81%A8%E3%81%8D%E3%80%81%E9%9F%B3%E9%87%8F%E3%82%92%E3%81%9D%E3%82%8D%E3%81%88%E3%82%8B%EF%BC%9Asoundengine-free-%E7%B7%A8/　を参照のこと。（2020年12月28日最終検索）

7）Audacityで主たる音声ファイルに別の音声ファイル音声を挿入する方法の詳細は、「Audacityの易しい使い方―【Audacity】音声の一部にピー音を入れる方法【合成】」https://audacity-mp3.xyz/pi-onn/を参照のこと。（2020年12月28日最終検索）

8）筆者が利用した書籍は、リンクアップ（2019-第３刷）

9）ジョン・ハッティ(2009)p.233-234

10）Jones, H. J. (1991). The effects of the Writing to read computer

program on reading achievement and attitudes of second-grade children. Unpublished Ph.D., Texas Woman's University. TX.

参考文献

牧野成一／鎌田修／山内博之／斉藤真理子／荻原稚佳子／伊藤とく美／池崎美代子／中島和子（2001）『ACTFL-OPI入門―日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク

牧野成一／奥野由紀子／李在鎬／鎌田修／嶋田和子／三浦謙一（2020）『ＯＰＩによる会話能力の評価―テスティング、教育、研究に生かす』凡人社

Charles Stansfield（1989），“Simulated Oral Proficiency Interviews.”, Eric Digest

ジョン・ハッティ（2009）山本光陽監訳『VISIBLE LEARNING　教育の効果　メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』図書文化

リンクアップ（2019-第３刷）『今すぐ使えるかんたんEx YouTube　投稿＆集客　プロ技セレクション』技術評論社

参考資料

北海道大学2016年度版日本語スタンダーズ
https://www.oia.hokudai.ac.jp/cier/wp/wp-content/uploads/2019/03/nihongo_standards.pdf
（2020年12月27日最終検索）

ＪＦ日本語スタンダード共通参照レベル：自己評価表
https://jfstandard.jp/pdf/self_assessment_jp.pdf
（2020年12月27日最終検索）

OMF International Japanese Language Centre（作成年不明），
“Preliminary Japanese Speaking Test（P-SOPI）Option 1 Test Booklet”
国際福音宣教会日本語・日本文化センター

すずき　のりこ（高等教育推進機構国際教育研究部元非常勤講師）

【添付資料】

動画作成手順

① 作問する。

② 全体の構成を組む。

ここでは、テストの説明や指示の文、問題の提出順序を考える。

筆者はExcelで大問１問毎に行を変えて吹込み音声のシナリオを書いた。この方法だと、追加の問題を後から追加挿入したり、行を入れ替えて提出順序を自由に変えることもできる。順序が決まったら、行の上から順に番号をつけておく。

③ ②の問題文をスライドにコピペする形で、パワーポイントで試験問題のスライドを作る。

④ パワーポイントでは、特定のオブジェクトを選択して、［アニメーション］タブを開き、そこにある［継続時間（アニメーション再生にかける時間)］や［遅延（指定した動作タイミングから実際に動き出すまでの時間)］機能を使って、オブジェクトをスライド上で動かすタイミングやオブジェクトが動く時間を指定することができる[1)]。この機能を使って、回答時の発話制限時間が目で分かるようにしておく。

⑤ １問１音声ファイルを目安にして台本を読み上げ録音をする。保存の際、②で組んだシナリオにつけた数字を半角でファイル名の最初につけておく。

⑥ 無料音声編集アプリ：Renee Audio Toolを使って、録音した複数のファイルを１つのファイルに結合する[2)]。

1. Renee Audio Toolを立ち上げ、スタート画面で「結合」のボタンを押す。
2. ボタンを押して出てくる画面の操作ガイドに従って、まずは「ファイルを追加」ボタンをクリックして作成した全ての音声ファイル選択する。
3. 同じ画面下の「出力形式」を指定（：ＭＰ３）し、「品質」を指定（：高〈サイズ大きい〉）し、「出力先」を任意に定めて、「全てのファイルを一つに統合」と書かれたチェックボックスにチェックを入れて、「開始」ボタンを押す。

⑦ ⑥の状態だとファイル内の音量が結合させたファイルごとに大きかったり小さかったりするので、無料音声編集アプリ：Sound engine

を使って、全て同じ音量にそろえる[3)]。

⑧　別の音声編集アプリ：Audacityで⑦で音量調整したファイルを開いて、ベル／トーン音（Web上の無料の音声ファイルを利用）と無音部（学生に吹込みをしてもらう部分）を挿入[4)]。

1．　メニューバーのすぐ下にある「開く」ボタンを押し、さきほど1つにまとめた音声ファイルを選択して開く。

2．　「音量」→ノーマライズ（正規化）を選択（※音質が変化しない範囲で、音量を最大化する）

⑨　作ったおいたパワーポイントのファイルの最初のスライドに⑧の録音ファイルを貼り付ける。貼り付けるとスピーカーのマークがスライドに表示される。それを選択した状態で、メニューバーの「再生」をクリック。「オーディオのオプション」の「スライド切替後も再生」のチェックボックスにチェックを入れておく。

⑩　「スライドショーの記録」をする。⑨のＰ．Ｐ．ファイルで、貼り付けた音声を再生しながら、その音声に合わせてアニメーションを動かし、スライドを進めるタイミングを記録する。

⑪　「スライドショーの記録」が終わったら、そのファイルのメニューバーにある「ファイル」メニューの「エクスポート」をクリックする。

⑫　「ビデオの作成」をクリック。出力ファイル名を入力して「保存」ボタンを押してしばらく待つとＰ．Ｐ．ファイルがＭＰ４という形式の動画ファイルになる。

動画ファイルはWindows Media Playerなどで再生できる。

⑬　YouTubeに「限定公開設定」でアップロードする。

注

1）アニメーション設定方法の詳細は、「アニメーション効果の開始タイミングと速度を設定する」
https://support.microsoft.com/ja-jp/office/%E3%82%A2%E3%83%8B%E3%83%A1%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3%E5%8A%B9%E6%9E%9C%E3%81%AE%E9%96%8B%E5%A7%8B%E3%82%BF%E3%82%A4%E3%83%9F%E3%83%B3%E3%82%B0%E3%81%A8%E9%80%9F%E5%BA%A6%E3%82%92%E8%A8%AD%E5%AE%9A%E3%81%99%E3%82%8B-bf8c1cb4-c827-48b6-b756-8c1a3e681

a60
を参照。（2020年11月15日最終検索）

2）Renee Audio Toolを使った、音声ファイルを1つのファイルに結合する方法の詳細は、
「Renee Audio Tools（レニー オーディオ ツール）」
https://freesoft-100.com/review/renee-audio-tools.htmlを参照。（2020年11月15日最終検索）

3）※Sound engineを使った、音声ファイルの音量をそろえる方法の詳細は、
「チャーリーが乗っています―音楽ＣＤをつくるとき、音量をそろえる：SoundEngine Free編」
https://bbb9780.wordpress.com/2015/04/29/%E9%9F%B3%E6%A5%BDcd-%E3%82%92%E3%81%A4%E3%81%8F%E3%82%8B%E3%81%A8%E3%81%8D%E3%80%81%E9%9F%B3%E9%87%8F%E3%82%92%E3%81%9D%E3%82%8D%E3%81%88%E3%82%8B%EF%BC%9Asoundengine-free-%E7%B7%A8/を参照。（2020年11月15日最終検索）

4）Audacityで主たる音声ファイルに別の音声ファイル音声を挿入する方法の詳細は、
「Audacityの易しい使い方―【Audacity】音声の一部にピー音を入れる方法【合成】」
https://audacity-mp3.xyz/pi-onn/を参照。（2020年11月15日最終検索）

An Attempt at Providing Tests for a Learner of Beginner's Japanese Conversation with YouTube

SUZUKI, Noriko

This is a report on an exam experiment conducted simultaneously online using YouTube video streaming to measure the conversation skills of beginner-level Japanese learners.

The Intensive Japanese Language Course is for students who study Japanese for the first time. In the conversation classes of the course, which I was responsible for, I've had students think about the differences in education systems between their home countries and Japan and to share information with their classmates in the second half of the semester. The final exam has been an opportunity to present the results of their learning. Students wrote speeches on the theme of their country's educational system and its problems and gave the speeches without a manuscript. However, due to the spread of COVID-19, classes were forced to go online. Only one of the students scheduled to take the course was able to enter Japan. This meant he had no classmates, was restricted from going out and lost the opportunity to practice communication using the Japanese he had learned, despite being in Japan.

Therefore, I needed to change the format of the final exam and I created a video exam with Microsoft PowerPoint and several free audio-editing applications and conducted the exam by distributing it on YouTube privately. The exam aims to evaluate the ability to improvise speech close to real-life usage situations. With the audio recording function on their smartphones running, the student followed the instructions and spoke with the speaker in the video and submitted the audio data as their answer.

The results showed that this type of exam question video could be created and conducted with only a computer, a microphone, and an internet connection without any other material costs. This method also shows that it

is possible to avoid inconsistency in evaluation caused by the lack of concentration that could occur in an interview-style exam as the instructor acts as the speaking partner in the flesh, and that students can take the exam with their smart-phone. On the other hand, it was also found that both instructors and students must have a sufficient Wi-Fi environment for such an exam to be conducted. Moreover, it takes time for instructors to familiarize themselves with ICT tools to create the exam.

Currently, most instructors are not professionals with online classes or ICT tools. However, acquisition and mastery of ICT tools should not depend on the efforts of individual instructors only. It should be supported sufficiently by their educational institutions to help them become proficient in ICT tools.